

# ダンディズムと世之介

篠原進

ダンディズムの語源は反逆・反抗であり、低俗への反発である。

——ポードレル『現代生活の画家』第九章「ダンディ」——

世之介の後半生(巻五以下)は、甚だ評判が悪い。実相寺昭雄氏は、そこに「生き乍ら死んでいる世之介」(瀕死のエクリチュール)追跡『好色一代男』、『日本の説話』(四三三頁)を見たし、『好色一代男』(以下書名は適宜略記する)に「芳しい青春の香氣」(『西鶴』評論と研究(上)一四八頁)を嗅ぎとった暉峻康隆氏でさえ、こゝう書かざるを得なかった。

すでに父の死によって遺産を相続し、名実ともに元禄のダンディとなつて遊里に入った三十五歳以後の世之介の愛慾が、打つて變つて観念的なものになつてしまつてゐる(同書・一四九頁)。

それでは、なぜ彼の愛慾は観念的なものとなつてしまつたのか。氏は続けて言う、「生の解放」を謳い上げるつもりで選んだ遊里という空間は「愛情よりも金銭」(同書・一五〇頁)が物を言う場所であり、「愛慾は卒直に自己主張ができない」(同)かつたからだ。本当にそうか。もしそうなら、西鶴は(巻四まで書いた時点では)遊里のそんな構造にさえ気づかなかつたことになる。

西鶴はなぜ、後半の四巻を書いたのか。もちろん、従来もそれに対する解答が示されなかつたわけではない。曰く前半は貴種流離譚であり、後半はその結果としての成功譚であると。また、枠として借りた『源氏』の五十四帖という数字に引きずられたからと。そして、「新しい遊女評判記、諸分秘伝書を書くことを志

した」(野間光辰氏『定本西鶴全集』(解説)一五頁)からだ。いかにも、それらの説明は、それぞれ充分な説得力を持っている。しかし、どこか物足りなさが残ることも否定できない。

そんな中で、私が注目したのは、廣末保氏の次の言葉である。

(民衆の新しいエネルギーと対立し、それを歪めながら包みこんでゆこうとする非人間的な商業資本のもとで生まれた文学)それは、現象的には解放的にみえながら、本当に人間を底の底からつくりかえ、解放してゆくものとはならない。えてして人工的な美意識を生みがちである。それはまた、一種の傍観的な享楽主義、虚無的な影さえひそめた利那的耽美主義を發展させる。民衆の實體から浮き上つたダンディズムができてあがつてくる(俳諧から浮世草子への展開)『元禄文学研究』一二五頁)

つまり、民衆のエネルギーを商業資本が凌駕した結果生まれた、「仮構の花」がダンディズムだといふのである。ここで二つのことに注意したい。一つは、氏がダンディズムを民衆のエネルギーの対義語として捉えていること。他の一つは、先に示した暉峻氏の見解に、野間氏の『一代男』に対する古典的な主題論(「一人の人間が野暮から粹に成長する色道修行の過程を示さうと意図した」(先掲書・一六頁)を加え、廣末氏の文脈で読むと、次のような構図の設定が可能になるということ

である。

○前半↓世之介が放浪を重ねながら野暮から粹へと成り上る過程を描き、そのダイナミズムに民衆の新しいエネルギーを象徴させた。

○後半↓世之介が金銭を獲得し、粹として遊里に安住していく様子に非人間的な商業資本の跳梁ぶりと、それへの嫌悪を寓した。

もし、この図式が正しいとするなら、低調な後半は西鶴の計算通りということになるし、『二代男』には(民衆のエネルギーという)ダイナミズムを、非人間的な商業資本が克服し、ダンディズムとして定着していく様子が寓されているということになる。

いかにも、こんな深読みや、ないものねだりはあまりにも大時代的で、はやらないかも知れない。しかし、主題を弁証法的に追求していくための一つの措置としては、極めて魅力的に思えるのである。以下、その措置を検討してみよう。ただ、その前に、先学が否定的に語ったダンディズムの正体を見極めておく必要がある。そうすることで、とりあえずダンディズムを復権させなければならない。

## 一

私は先ほど〈粹〉に〈ダンディ〉とルビした。なぜなら、暉峻氏や廣末氏が両者を同義語として使用しているように思えたからである。しかし、言葉の厳密な意味において、両者は同義語ではない。では、どう違うか。粹とは何か。遺憾ながら、詳述できるだけの余裕はない。ただ、それは禁欲精神を種とし、金銭を肥料として、遊里という土壌にのみ咲く美意識の花、とだけ言っておく。それではダンディズムとは何なのか。

ダンディズムとは、一九世紀の初頭、稀代の伊達男であるジョージ・ブランメル(一七七八—一八四〇)らイギリスの青年紳士の間に流行した、伊達好みのお洒落精神の謂である。それが、バイロンなどを通じてフランスに伝わり、ボードレールによって文学上のダンディズム(仏語ではダンティスム。以下区別しない)と

して確立する。当面の問題となるのは後者であるが、これをひとことで言えば、文学的お洒落精神ということにでもなるうか。しかし、これでは何も言ったことにならない。少し具体的な記述に就いてみる。

ボードレールは、その著『現代生活の画家』において、わざわざ一章をさき、『ダンディ』(第九章)を説明して、こう言っている。

金持で、ひまがあり、たとえもう麻痺していても、幸福の跡をつけて追うほかに仕事のない男、ぜいたくの中に育てられて、子供の頃からすでに他人の間たちの服従に慣れた男、そしてつまるところは、よい趣味を働かせるほかに職業のない男、こうした男は常に、どんな時代にあつても、(俗点筆者) 人とはまったく別物の、風貌をそなえていることだろう。ダンティスムはひとつの漠然たる制度、決闘と同じ奇妙な制度だ(人文書院『ボードレール全集』三三〇頁。以下引用は、同全集に拠る)。

大切なのは、ダンディズムとは文芸思潮や文学運動ではなく、各個人(の社会や時代や国に関係なく、個個に出現することになる。つまり、ボードレールがカエサル<sup>カエサル</sup>の例を挙げていることでも分る如く、それは「古」く「普遍的なもの」(同頁)であるから、それを西鶴の時代に見出しとしても、決して唐突ではないということなのである。

もう少し、ボードレールの説明を辿ってみる。彼は続けて言う、ダンディには「暇とお金」が不可欠であると。彼らはそれを後楯として恋愛に従事する。しかし、金を渴望したり、恋愛を目的視したりはしない。それから、何よりも優雅さと品位を重んじながら、低俗に反抗し、強い精神を以て独創性を身につけて行くのがダンディなのだ。そして、「ダンディズムは、頽廢の世における英雄性の最後の輝きであつて……一個の落日である。かたむく太陽さながら、壯麗で熱を欠き、憂愁にみちている」(三三二頁から三三三頁)と。

もちろん、これだけでは不十分である。他にも「ダンディの心得を説いた」(瀧澤龍彦氏「わたしのボードレール像」『無限』)といわれる『火箭』や、『赤裸の心』な

どがあり、その検討が要請される。それらの書物と、先考（佐藤朔氏『ポードレール』など）を参照しながら、ダンディズムの基本的な柱を、私なりに次の六つにまとめてみた。

(1) 都会好き（都市空間重視）

↓「大都会のもつ宗教的陶醉」「群衆の中にいる時の快感」（『火箭』）。「人間は非常に人間が好きなので、都会を逃れても、それはまた結局群衆を求めることになる」（『赤裸の心』）。

(2) 唯美主義

↓「ダンディは絶えず崇高たらんと希求せねばならぬ。鏡を前にして生き、かつ眠らねばならぬ」（『赤裸の心』）。

※特に自然美より人工美を好む（『現代生活の画家』第十一章「化粧礼讃」参照）。

(3) 余裕（時間・経済・精神）

↓「ダンディは何もしない」（『赤裸の心』）。「ダンディはお金を渴望したりはしない」（『現代生活の画家』）。

※先に引用した如く、ダンディは金持で暇があり、贅沢に育ち、服従に慣れ、よい趣味を働かせるほかには職業のない男（ダンディ）だから、人生に確固たる指標を持つことはない。だから倦怠に陥る可能性も大きい。

(4) 反俗主義と反抗精神

↓「（ダンディズムとは）独創性を身につけたいという熱烈な欲求」（『現代生活の画家』）。「ダンディの語源は反逆・反抗であり、低俗への反発である」（『同』）。

※但し、この精神は非政治的なものであり、本質は自尊心や孤高を守る矜持にある。また、それは一步誤ると、鼻もちならない貴族主義に陥るといった危険性をも孕んでいる。

(5) 毒と悪の礼讃

↓「悪の中にこそ一切の悦楽がある」（『火箭』）。「娼婦・踊り子には悪からくる美があり、憂愁を帯び、怖ろしさを秘めた近代的な美がある」。「アーンシ

ユ（注・麻薬の一種）は人間の個性の激化と同時に、周囲の状況や環境に対する極めて鋭い感受性をよび起こす」（『個性増加の手段として、葡萄酒とアーンシユの比較』）。

※ポードレールは「悪から美を抜き出すこと」を信条とした。なぜなら、悪は疎外されているという点で低俗とは対極にあるし、悪を成すことには、無上の緊張感があるからである。また、一見美と思えないものに美を見出すという点で、(4)と根を同じにしている。

(6) 陰影と憂愁

↓「美とは、熱く燃えていてしかも悲しい或るもの」（『火箭』）。「ダンディズムとは一個の落日である。かたむく太陽ながら、壮麗で、熱を欠き、憂愁にみちている」（『現代生活の画家』）。「僕は絶えず自分に尋ねます。それが一体何になるものか？これが何になるか？と。これこそ真に憂愁の精神なのです」（母への書簡）。

ダンディは仕事を持たない。仕事をしない人間の一日は長く、死ぬほど退屈で気怠い。かといって、ダンディは自殺するほどの情熱家でもない。とすれば道は一つしかない。それは、「当座／＼に、やらして」（『浮世物語』巻一の）、瞬時の快楽や刺激に無上の至福を感じつつ、生きて行くことである。

ダンディとは、ある意味で（全く生産をせず）消費に徹する人の謂でもある。だから、ダンディは生産の場である農村よりも、都市を好む。なぜなら、そこが巨大な消費空間だからである。そういった意味で、ダンディズムを民衆の生産的エネルギーと対置させた廣末氏の公式は、基本的に正しい。しかし、反生産性という点では、ダンディズムは商業資本とも対立関係にあるのだ。因みに、『色道大鏡』は粹に至る段階を二八品に分け、その極致を「大極品」としていた（巻五）。しかし、ダンディズムはそういった成長論とは無縁だ。なぜなら、ダンディは成るものではなく、（資質として）あるものだからである。つまり、粹には成れてもダンディには成れないということなのである。世之介は粹に成ったのか、ダンディだったのか、そして世之介とは何者か。それを解明することは、主題に直結すること

とになるであろう。

## 二

世之介とは何者か。野間光辰氏は言う、

「世之介は世之介といふ個體的存在ではなく、世之介といふ名によって代表せられた多くの浮世男・好色男・當世男の複合的存在である」(『定本西鶴全集』(一)〔解説〕一四頁)

と。この考えは、今日かなり支配的である。例えば、廣末保氏も次の如く記している。

西鶴は『一代男』によって、ただ好色生活を書いただけでなく好色を文化として表現した。世之介という名は、その文化を象徴するもの名であった。(『未完の形式——西鶴の主体——』『講座日本文学——西鶴』(四) 五四頁)

なるほど、一方で「そのような複合的存在の世之介を同時に個體的存在として描くことの出来なかつたところに西鶴の限界を見たい」(野間宏氏「西鶴と近代小説」『日本文学大系』月報七(三頁)) というような批判がないわけではない。しかし、いずれにしても、世之介を同時代人の情念や文化の象徴的存在とみることでは共通している。

それでは、そういった「複合的存在の世之介」が「粹に成長」(『傍点筆者』) することによってどんな意味があり、彼が日本を旅立つことにはどんな寓意が込められているのだろうか(ここで言う寓意とは、とりもなおさず主題のことである)。

周知の如く、世之介の旅立ちをどう読むかということについて、これまで様々な見解が示されている(詳細は、吉江久弥氏「西鶴文学研究」など参照)。代表的な見解を私なりに整理してみると、次の如くなる。

④ 暉峻康隆氏①「『一代男』は、近世前期町人の青春の讃歌」(『西鶴——評論と研究』(一) 一五一頁)。  
⑤ 「見はてぬ夢を求めての旅立ち、未知との遭遇を期待した旅。……可能性の追求を象徴した結末」(NHKブックス『好色物の世界』)

一四六頁)。

⑥ 野間光辰氏②「世之介の女護の嶋渡りは、最も深刻な絶望の表現、悲愴極まる捨身の行」(『岩波講座日本文学史』一三頁。後に『西鶴新新放』所収)。

⑦ 前田金五郎氏③「当時は、人生六十年説も広く行われていたので、西鶴は、その常識に従ったまで……(旅立ち)は、此の世からあの世への如渡得船のもじり……盛大な生きながらの葬式」(『古典文庫』『好色一代男』〔解説〕四頁から七頁)。

⑧ 宗政五十緒氏④「町人たる者は遂に粹の真極に至りえぬことを知った世之介はその日本から脱出する」(『尚学図書』『鑑賞日本の古典』西鶴集巻 五四頁)。

⑨ 諏訪春雄氏⑤「挿絵から見る限りでは、その旅立ちには) 充足した果ての静穏な雰囲気」が感じられる(『西鶴本の絵——好色一代男を中心に——』至文堂『講座日本文学——西鶴』(一) 二七頁)。

⑩ 谷脇理史氏⑥「世之介の船出は、一代記物語の伝統の中で作品が終わる時の形を踏襲しているにすぎず、そのパロディとして世之介にふさわしい祝意をこめた最終章を構想しているにすぎない」(『好色一代男』の排諧性)『西鶴研究』序説 一七〇頁(初出は『文学』昭和五年三月号)。

⑪ 森山重雄氏⑦①「最後の結末にはなんらのロマネスクもない代わり、なんらの絶望もない。この結末に捨て身のロマネスクをみたり、粹の美学への反抗をみたり、絶望をみたりするのは、あまりに主題論的に、『一代男』を見すぎ(『傍点筆者』)るのである。もともと世之介は浮世の世之介という類的人間であった。その類的人格の好色修業が終わったとすれば、もう女護嶋という別の次元に渡るしかない」(『講談社現代新書』『西鶴の世界』二七頁)。  
②「世之介を中心とした好色共同体の一つの世代が完了したことを示した」(『新読書社』『西鶴の研究』八六頁)。

③と④との結論は正反対であるが、旅立ちの中に積極的に主題を読みとっていかうとする姿勢に於ては軌を一にしている。これに対し、他の五つ(⑤⑥⑦⑧⑨⑩)は、一応旅立ちと主題とを切り離して考えている点に違いがある。その理由は、森山重雄氏の論難(⑪の①傍点部)に明確である。ただ、問題なのは旅立ちを絡め

ないことで㉔に代る主題をどの程度まで提示し得るかということだ。因みに、谷脇理史氏は「広い世界のくみがかたい「人のこゝろ」を面白おかしく具体化する」(前掲書・一六八頁)ところに『一代男』のねらいがあったとまでしか書かなかったし、「主題」という言葉で表現できるようなものはない(同二六七頁)と、言わざるを得なかったのである。

もちろん、右の論考における谷脇氏の立場は明瞭である。それは、「哄笑しながら読み終えた『一代男』をしかつめらしく勿体らしいものとして批評」(同七四頁)している㉔への反指定だ。確かに、氏の批判は「読んだ実感と論じたものが非常に離れ」(廣末保氏『シンポジウム日本文学・西鶴』一三頁)がちな私たちにあって、極めて刺激的である。しかし、これにも問題がないわけではない。例えば、㉔の暉峻氏の説も、谷脇氏と同じように「作品それ自体がわれわれに語りかけてくれるものを素直に受け取」(『好色物の世界』一四四頁)った結果、導き出されたものだということである。つまり、㉔は同じ姿勢で『一代男』に對したのも拘らず別個の読みとなつて出たのだ。なぜか。それは、主題を着目するレベルが違ふからである。

いずれにしても、大切なことは、『一代男』の面白さを充分認めた上で、他に何があるかを探ってみることではないだろうか。その場合、(㉔)の読みの是非は別として)旅立ちに何らかの寓意を読みとつていこうとする姿勢は、不可欠のよきな気がする。以下、『一代男』が「語りかけてくれるもの」を大切にしながら、私なりの読み方を提示してみる。

## 三

世之介とは如何なる人物か。はっきりしているのは、彼はいつも枠からはみ出そうと、もがいているということである。放浪をはさみ、世之介は二つの枠の中に身を委ねることを余儀なくされる。一つは年齢(それに付随する町人としての修行も含む)であり、他の一つは遊里である。とりあえず、一つ目の枠から見ていく

ことにする。

○(巻一の二)七歳まで。「桜も散るに敷き、月はかぎりありて入佐山」こうした「自然美の有限性(つまり中世美学)に對する不信」(暉峻康隆氏『西鶴』評論と研究(出)二二頁)の中で、世之介は誕生する。大切なことは、世之介が何時、何処で、誰と誰との間に生まれたかが量されているということである。なるほど、想像は容易だ。つまり、天和二年の神無月に六〇歳で旅立つのだから、生まれたのは逆算して、元和九年(阿部次郎氏二代男年譜『徳川時代の芸術と社会』(角川選書)一三七頁。場所は京都の郊外、嵯峨・東山・藤の森の中の一つ。父親は夢介。母親は当時「名高き」三人の遊女(かづらき・かほる・三夕)のうちの一人。

しかし、夢介は替名であり、母親の特定は出来ない。彼の出自は依然として不明なのである。もちろん、不明と不在は違う。だから、これを以て「母の不在」(松田修氏『西鶴における作家的出発』『文学』昭和四五年一月・五一頁)を読むことに左袒は出来ない。

出自の曖昧化。これはむしろ、説話や昔話の常套的方法ではなかったか。いや、そんな遠い時代に遡らなくとも、浮世坊(『浮世物語』(寛文五年刊))の出自を想起してみるだけで充分だ。了意はこう書いている。

(『浮世坊の』)父は、「そんじやうそこに奉公せし悴侍(注・下級武士)なりしが、「追従」を以て出世。しかし、戦場で臆病ふりが暴露され、「重ねて傍輩にも交られず、町人になり、日頃取りたくはへたる金銀多ければ、うとく人といはれて籠りゐたり。その間に、息子をまうけたり」(巻一の二「浮世坊なりたちの事」)

と。これが瓢太郎(浮世坊)だと言うのである。そこには、父の名前はもちろん、母の名も誕生の地も一切出て来ないのである。こう考えてくると、世之介の出自はむしろ、詳しく、と言わざるを得ない。

世之介の出自は、曖昧かつ詳しい。私はそこに『一代男』の基本的な性格があるように思えてならない。曖昧かつ詳しいこと、それを裏返せば「もっともらしい嘘」ということである。この「もっともらしさ」とは、ある意味で読者を想像

力の空間へ誘い込むための撒き餌でもある。それをより効果的にするため、西鶴は次の如き刺激的な言葉を点火栓として配した。「あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」と。読者の頭の中にある想像力の内燃機関に火花が散り、彼らは世之介のモデル探しを始める。つまり、灰屋紹益(後藤明生氏「吉野太夫」)「吉行淳之介氏「好色一代男」三五二頁など)や、上村吉弥(彼の定紋が(世)である)といった実在の人物を世之介と重ね合わせてみるのである。しかし、それらは決して、十全には重なり合わない。なぜなら、中核部分を曖昧にしてあるからである。重ならないから探す。こうして、想像力の運動は不断に続くこととなる。

もっともらしい嘘。同じ文脈が他の部分にも適応できる。例えば、七歳の世之介が腰元の袖を引くこと。また、「たはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」といった記述。それらは、決して「本当らしくないこと」(谷脇理史氏「西鶴研究序説」六三頁)ではないのである。『世間娘容気』(巻一)の例は極端としても、幼児が侍女に好意を感じるということは、極めて日常なこと、(ボードレールがそうであった)なのだ。ただ、その幼児が「戀は聞といふ事をしらずや」というような言葉を吐き、「比較を絶した早熟性」(森山重雄氏「西鶴一人間喜劇」)『封建庶民文学の研究』六六頁)を垣間見せる時、はじめて虚が生まれるのである。しかし、それとて日常的な空間の生活者が、時おり見せる異常性の一つに過ぎないのではないだろうか。

敷の問題も同じだ。その膨大な数も、読者周知の業平伝説(例えば、『鴉鷲合戦物語』)には先例があるし、読者はそれとこれを重ね合わせ考えることで、むしろ逆に「ありそうな話」へと転換するのである。

それでは、世之介に多少なりとも、「異常性」を付与したのは、作者の如何なる意図に基づくものだろうか。「当代ダンディーの生長期を喜劇的に生きとおせうとする」(森山重雄氏「封建庶民文学の研究」六五頁)彼の姿を描きかけたためだろうか。それとも、「町人社会の欲望や享乐的風潮を容認し、これを哄笑」(『同』六六頁)するためだったのだろうか。以下、考察を続ける。

もう一つ注目したいのは、冒頭の言葉に呼応するかの如く、世之介をこう描写

していることである。「此菊の間へは我よばざるものまいるななど、かたく閑すえ……ふどし人も頼まず、帯も手づから前にむすびてうしろにまはし、身にへうぶきやう袖に焼かけ」と。世之介は七歳にして自分の領域と美意識とを持った。また、その美意識は、身体に化粧を施していることで分る如く、専ら人工美へと向けられているのである。自然美から人工美へ。中世的な美意識は反措定となり、世之介によって乗り込められていく。世之介は花を愛でない。歌を詠まない。なぜなら、彼の興味は専ら人間にあり、それが造型する人工美にあるからである。

ボードレールは服装に凝り、化粧までしたといわれる(河盛好威氏「ダンディズムの時代」『ダンディズム』など)。世之介は七歳にして、ダンディの資質充分なのである(ダンディの定義(2)参照)。

○〈巻一の二〉 八歳。「日常的な空間の生活者が、時おり見せる異常性」は、ここにも同じ例が見られる。世之介は「小学に入べき年(八歳)」ということで、山崎の姨のもとにやられる。そこで彼は、従姉のおさかに惚れ、指南坊に恋文の代筆を依頼することになる。ここまでは、よくあることである。不安そうに指南坊の手先を覗き込む子供。それが、紙幅が尽きたという事態に「なをく書を」と発し、突如艶書の通ぶりを見せる。ここに至って一挙に虚の世界へとなだれ込むのだ。つまり、ボードレールが「美の本質の一部」という「唐突さ」を、世之介は内包し垣間見せるのである。

○〈巻一の三〉 九歳。鼓を稽古することも、「世をわたる男芸」ということで母方の所縁に修行に出ることもよくあることだ。また、児童が異性の身体に興味を持つこともないわけではない。しかし、それが謡曲の稽古に、「恋」という詞章を繰り返して、遊び金として「死一倍」を借り、女の行水を覗くに、遠眼鏡を持ち出すところが九歳の子供としては、唐突であり、また面白いのである。

世之介はここで、ボードレールの言う「覗く男」として登場する。窃視、それは美を求めて禁忌を破ることである。彼は悪徳を犯す栄光に没りながら、拡大された世界に期待し目を凝らす。しかし、そこで見たもの、それは「みる人はあ

らじ」と自慰に耽り弛緩した、醜い女の姿であった。「影を嗜み給へ」(巻六の四)とは、世之介の口癖でもある。だから彼は、それを「見とがめ」(註)、「貞しめ指さして笑」うのである。

○〈巻一の四〉 一〇歳。彼は念者を得る。少年が衆道に走ったり、下坂小八流という、最新の髪型ヘアスタイルにしたりすることも珍しいことではない。ただ、衆道相手の発見法が、いかにも世之介らしいのである。つまり、彼は「影隠して住ける男」が自分に傘をさしかけ、替草履や「きよらなる」櫛道具を差し出すような嗜みイチャイを有しているという、その意外さに「ゆかし」さを感じたのであった。ここで世之介の美意識を一口で言うなら、「真白だと称する壁の上に汚い様々な汚点を見るよりも投捨てられた襦袢の片きれに美しい縫取りの残りを発見して喜ぶ」(永井荷風『見果てぬ夢』精神ということになるだろう。それはまた、衆道の練達者のみ  
が持ちうる境地でもあった(『男色大鑑』など参照)。

なるほど、衆道初体験であり、粹でもない世之介がそんな精神を持っていたというのは訝しい。しかし、それだからこそ、彼は「黠こましく」、「十歳の翁」なのである。つまり、「黠こまし」も「十歳の翁」も、「利発、聡明」(前田金五郎氏『好色一代男全注釈』(八二頁)の意であるが、結局は子供であつて、子供でない、ということである。彼はその意味でも年齢の枠を破ろうとしているのだ。いや、年齢の枠を破ろうとするからこそ世之介は世之介なのであり、彼は怪物なのである。それでは何故、世之介は年齢を超えようとするのか。その点で注目したいのは、先述した彼の精神がダンディズムの定義(4)と(5)と軌を一にしているということだ。世之介は早熟なダンディだったのである。ダンディゆえに、彼は枠を超えようとする。なるほど、粹は成長し成るものであるから、幼児の粹は考えられない。しかし、第一節で述べた如く、ダンディズムは資質として生まれながらにして在るものであるから、世之介の幼年時代にそれが顕現したところで何ら不思議はないのである。

○〈巻一の五〉 一一歳。全く同じことが、ここにも言える。つまり、伏見撞木町に遊興に出かけた世之介は、荒廃し「かすかなる(貧弱な)」部屋に、「やさし

き女」を見出し、彼女の秀れた歌ごころを「ふかくしの」んで「見捨す通」うのである。

なるほど、ここでも一二歳の少年にしては、捌きが見事すぎる。しかし、この点についての分析は、前話に尽きているし、省略する。

○〈巻一の六〉 (二二歳)。それでは、本文中に彼の年齢が記載されない時、年齢を超えようとする世之介の精神はどう具現されていくのか。当然のことながら、その存在感は薄められてしまう。つまり、彼は行為者よりも批判者として、須磨や兵庫の磯せせりを、「磯くさく」「さもし」と総括するのである。なるほど、予想される年齢の一二歳にしては、その舌鋒は鋭い。しかし、本文中で彼の年齢をなぞらないから、年齢の枠を越えようとする世之介の動きが立体化しないのである。

○〈巻一の七〉 (二三歳)。一二歳で人並みに声 vari した世之介であるが、その性癖は「おとなはづかし」き程である。彼は露を盗みためて、清水八坂の色茶屋へ出かける。しかし、世之介はここでも不満を洩らす。「晝はなにとなくうちめりて、心地よからず」。料理は相変らず、「れい、のときん」と「お定りの蛸」が出て、女郎の口ぶりも「いやらしく」、「たまり兼」るほどだ。それでも腰つきに、「えもいはれぬ」所を感じて、枕を交すが、彼をおだてて米や味噌の無心を乞う女に、「都の人たらしぶり」を見抜き、緊張するのである。

○〈巻二の一〉 一四歳。世之介は袖をふさぎ、「聊おもふ事ありて」初瀬観音へと出かける。その帰途、飛子のしのび宿に立ち寄る。そして、大人びた顔をして彼らと話し込み、裏の世界を暴露して行くのである。

○〈巻二の二〉 一五歳。世之介は「小耳にもおもしろく」「ぬれのきく」この折に、友達から後家の好色ぶりを聞く。そして、石山寺へ出かけた時、自分も後家に誘われて、子を成しこれを捨てるのである。『大矢教』(二三)に次の句があることはよく知られている(森山重雄氏『西鶴の研究』(四二頁))。

六道の辻にいつから捨られた

世間はみなく夢なれや夢

西鶴にとつて捨子は、確かに「反覆的な主題」（森山氏・同頁）であった。それは、どう反覆的であり、世之介は何故子を捨てるのか（この場合、この子が後に世伝として『二代男』に再登場することは、考慮に入れる必要はないであろう）。私は『大矢数』の同じ巻（二二）から、次の連句を抜き出してみた。

すこしの義又音高に云てくる

浮世にすめは子共友達

子供に象徴される家庭や、世間付き合いの煩しき。右の句に、西鶴のそんな意識を読みとるのは間違ひであろうか。弛緩した空間である家庭を嫌悪すること、それは、ダンディズムの重要な構成要件であった。つまり、彼の「子捨て」はダンディズム宣言なのだ。世之介は一代男として「一生子なくくらす」（『醫論』巻二）ことを、ここに決意したのである。彼はそのため、むしろ進んで「子捨て」といふ十字架を背負った。放浪の伏線はこれで張られた。

—— こういった読み方をする場合、その宣言が初瀬観音や石山観音を参詣した後に出されていることの意味は大きい。次節で再説する。

○〈巻二の三〉 一六歳。世之介は男伊達の仲間に加わり、妙寿の「くら宿」（秘密サロン）で、悪徳に耽る。元服した彼は、或る時、小間物屋源介の女房の「いとやさしき有様」に心を奪われ、彼女を襲って眉間を討たれる。世之介の放埒も、相手が人妻とあつては通用しない。彼の額には、こうして侵犯者としての「悪の紋章」が深く刻み込まれたのである。

○〈巻二の四〉（一七歳）。二つの犯しによって、世之介が放浪する契機は整った。出立前夜。商人修行をさせようとする親の勧めもあり、世之介は越中越前に行商するため、奈良曝の調達に出かける。ところで、夢介の職業を「鉦山王」（吉行淳之介氏・前掲書・三六七頁など）と推測することへの反証がここにある。つまり、妾腹ではあつたが、世之介は二代目としての修行を重ね、麻から絹・綿と手広く扱う夢介の店を継ぐ予定であつた。しかし、「いま幾日過て京にかへるも惜しまれ、商売そつちのけで木辻町へ出かけ、遊興してしまふのである。

○〈巻二の五〉 一八歳。社長学修行の第一歩をしくじつた世之介であつたが、

二度目の機会が与えられる。それは、三週間後に控えた江戸店の決算を監査することであつた。江戸下りは厳しかったが、彼は「智恵つけ」なのだからと自分に言いかけさせて旅を続ける。しかし、江尻までたどり着いた時、彼はこう呟く「先けふまでの浮世、あすは親しらずの荒磯を行ば、自然水層と成なむも定難し」と。明日の難路を思うと居たたまれないのだ。生き急ぐ世之介。その時、彼の耳に艶なる三絃の調べが響く。わかさ・若松の二重唱による歌謡である。それは世之介を町人社会から脱落させ、根無草に導く前奏曲でもあつた。ここで西鶴が放浪の前奏曲として歌謡を選んだことの意味は深い。つまり、彼は世之介を、説経節の小栗判官に見立てているのだ（巻二の七参照）。ところで、説経節とは何か。それは、『小栗判官』や『しんとく丸』の例で分る如く、十字架を背負つて放浪する主人公の運命を、放浪者が語るといった、放浪そのものの芸能だったのである。

しかし、世之介は「吾妻の空物すごく、はやいかぬ氣に成」る。この記述に、彼のドロップアウトに対する躊躇いを読んだとしても、文脈を著しく外すことにはならないだろう。でも、遂に彼は断行した。つまり、世之介は町人としての修行を止め、女のもとに走る。そして、これを触媒として放浪を開始するのである。

森山重雄氏はこう書いている、「世之介の前半生は、勘当を区切りとして、以後、法制的には人別帳から削られた無籍者・世外人の生活に入る」（『西鶴の研究』四六頁）と。なるほど、形式的にはその通りであるが、実質的にはここから放浪者としての生活が始まるといつてよいであろう。次話の冒頭が「恋に其身をやつし、浅間敷姿と成て」江戸にたどりつく世之介の描写からはじまることは、その傍証でもある。

以上、一八歳までの世之介が（早熟なダンディとして）、年齢に象徴される日常生活の枠からはみ出そうと、如何に働き、如何にドロップアウトしていったかを見た。彼の営為が喜劇的に見えるのは、ドロップアウトへの希求があまりにも激しいがためであり、それが非日常的に思えるのは、私達が（年齢や職業といった）日



常的空間にあまりにも安住しているからともいえる。

四

世之介の放浪は更に、次の四つに分けられる。

- (一) やつし(巻二の六から巻三の一まで) ↓ (絶対者) に見い出され、華麗なる変身を遂げるための旅。
- (二) 逃走(巻三の二から巻三の七まで) ↓ 背負った十字架から「逃げる男」としての旅。

- (三) 贖罪(巻四の一から巻四の三まで) ↓ 十字架を背負っての地獄めぐりの旅。
- (四) 涅(ニルヴァーナ) 槃(巻四の四から巻四の七まで) ↓ 「心の劔」を捨て、世之介でなくな

った世之介が、再び死ぬための旅。  
 ○(巻二の六) 一九歳。何とか江戸へたどりついたものの、ドロップアウトの意志を明確にした世之介の行状は改まらない。彼は荒ぶる魂に促されて、江戸中の私娼窟を疾駆する。なぜ私娼窟なのか。太宰治の言葉を借りれば、こういうことになる。

「非合法。自分にはそれが幽かに楽しかったのです。むしろ居心地がよかったです」(「人間失格」)。

彼の放埒は非合法への傾斜を、日毎に強めていく。そして、遂に勘当という処断が下った。いかにも、今までは、大商人である夢介の政治力で、多少の放埒も揉み消しが可能であった。しかし、その暗黙の保護も失ったのである。もちろん、それは世之介自らが、進んで望んだことであった。なぜなら、その保護を絶ち切ることで、はじめて真のドロップアウトが可能になるからである。しかし、今度は命が危い。彼は智者の助言に従い、とりあえず出家となり、荒ぶる魂を鎮めることにする。鎮魂に多くの時間はいらぬ。二日後、彼はこう宣言するのである。

「後の世は見ぬ事、鬼ちかづきにならず仏にもあはぬ昔がまし」

と。彼は早速、香具売りに戯れ、破戒する。

- (巻二の七) (二〇歳) 貧は旅を促す。世之介は「終にはきゆる命、爰は(分別所)」と、吉野に峯入りする山伏に従い、江戸を出立する。峯入り恒例の懺悔話(「娘容気」巻六の一など参照)に際して、自分の背負った十字架を思い、「心はづかく」感じたのも束の間、「軀身を本質とする世之介」(森山重雄氏「西鶴の研究」四二頁)のこと、下向の道で早速精進落しをはじめめる。

彼は、藤の棚で貧家に不相応な「大組板」に目をつけ、「昔しはかくはあらざらぬ者のはて成べし」と、小栗判官並みに無理矢理入簪する。こんな時にも、石(落魄者)の中に玉(内福者)を発見しようとするダンディズム精神が出るのである。

- (巻三の一) (二二歳) 放浪には終りがある。そして、その終りはいつも同じ型を持っている。それは、厨子王が天王寺で梅津院に見い出された如く(「さんせう太夫」)、(絶対者)によって、(やつし)に秘めた本質を感知され、華麗なる変身を遂げることである。前話で世之介を小栗判官に準えたことを踏まえて、西鶴も彼に同じ型を準備する。ただ、近世に於ける(絶対者)とは金持ちのことであった。また、ここでの(聖痕)は、牡丹(「八犬伝」)や三つの黒子(「豊饒の海」)ではなく、瞿麦の紋所をついた琴爪であり、楊弓の技量であった。つまり、「諷うたひ」となった世之介は、「公家のおとし子」の如き、「泥中より玉の光」の如き内実を楽阿弥に見い出され、彼の案内役として華麗に「都がへり」をすることになるのである。

○(巻三の二) (二三歳) 話は前章で完結し、世之介の放浪も終る筈であった。しかし、ダンディゆえに「定住を拒否する」(森山氏・前掲書・四八頁)彼は、伝統的な型に納まることを肯んぜない。「此里の花もおもしろからず」と楽阿弥の庇護を固辞し、中国から九州を目ざして、再び旅を続けるのである。その感想はどうか。「酒ぶりかたし」であり、「やかまし」であり「せはしく、氣のつまる事」であった。こうして、世之介は放浪を志向しながらも、地方色が何とも自分に合わないことを自覚していくのである。

○〈巻三の三〉 二三歳。彼は旅芝居の一座に加わり、放浪を重ねる。しかし、「色ふかくて身のほどをしら」ないがため、追い出されて、大坂の浮世小路へ転がり込むこととなる。世之介はここでも蓮葉女と戯れ、二三歳の一年が終る。

この章では久しぶりに世之介の年齢が記される。しかし、それはもうあまり意味を持たなくなってしまう。なぜなら、既にドロップアウトした世之介の前には越ゆるべき年齢やそれに伴う社会的枠はないし、彼は今、その罅外に在るからである。

○〈巻三の四〉 (二四歳) 大晦日や正月は、一年中で最も家庭を意識させる時期である。掛取りの攻勢を何とか凌いだ世之介も、正月羽子板の絵を見ると、思わず「夫婦子あるをうらや」ましく感じてしまう。ドロップアウトをしてはみたものの、それを悔いる心とともに彼の背負った十字架が、時おり首をもたげて来るのである。是が家庭志向の伏線となり、世之介は大原の雑魚寝で老女に身をへやつし「た美女を見出し、「おもしろの花の都近く」で一緒に住むことになる。

○〈巻三の五〉 二五歳。家庭とは現実そのものだ。そこはまた、経済状態が露骨にあらわれる反ダンディズムの世界でもある。困窮した世之介は、半年で女を「置きりにして」、再び放浪を開始する。佐渡の「かな山」に何かあるような気がしたからである。彼は日和を待つ間、寺泊の遊廓に逗留する。そして、野鄙な様子に辟易しながらも、なけなしのお金を蒔き捨て、女郎に「こなたは日本の地に居ぬ人じや」と評されるのである。周知の如く、この言葉の解釈をめぐって論が割れている(前田金五郎氏「好色一代男全注釈(中)」参照)。私はとりあえず、世之介の放埒ぶりを喝破した言葉とだけ解釈しておく。

○〈巻三の六〉 二六歳。世之介にとって佐渡行きは、それほど深い意味を持っていたわけではなかった。だから、船が出ないと聞くと彼は、いとも簡単に進路を変更し、魚売りとなり、日本海側を北上するのである。途中、昔馴染みの比丘尼と会うが、思わず遊び尽しての「虫こなし」と言い繕ってしまう。自ら選び取った放浪の道であるが、落魄ぶりを誇る気分にもなれないのである。彼は酒田にたどり着き、そこで「しゃく(蓮葉女)」や「干瓢(惣嫁)」が生にしがみつき、蠟

命に生きている様子を見出し、思わず「不便なる世や」と発してしまうことになる。

○〈巻三の七〉 二七歳。世之介は懸御子に馴染み、彼女を鹿嶋神社に置き捨てにして、鹿嶋の事触れとなり、諸国を廻り、初摺女を孕ませて逃げる。しかし、もう逃げ通せない。彼は塩竈で巫女を強姦しようとして失敗し、ついに捕えられるのである。

色々おどせば、女ごころはかなくをしこめられて声をも得たてず。此悲し

さいか計ばい、道ならぬ道ぞとひざをかため涙をながし、こころのまゝにはなら

じと、かさなればはね返して、命かぎりとかみつぎ

簡潔ながら、見事な描写だ。傍点部からは、彼女の貞女ぶりが彷彿としてくる。ともかく、この事件で罰を受け彼は片小鬘を剃られる。内なる十字架が緋文字の如く浮かび上がり、これからそれを背負っての贖罪の旅、地獄めぐりがはじまるのである。

## 五

○〈巻四の一〉 二八歳。刺られた片小鬘も、眉間の傷(巻二の三)と同じように侵犯者としての、負の刻印であった。世之介は一転して、「あたまを隠し」「愧はづかしい気持ちを抱きながら旅を続ける破目に陥る。彼は早速「胡散成者」として、盗賊改めから疑われて留置される。地獄めぐりの第一歩である。彼はその運命を、こう受け止めている。「天罰たちまち身にあたりぬ」と。実際、合牢者の貌は「色くろく髪ながく両眼にひかりあつて」、「そのまゝ世界の凶に見し牛鬼嶋のごと(く)」であり、そこは正に地獄のようであった。しかし、世之介はその地獄でさえも遊興精神で制する。彼は「地獄にも近付」と、いつしか隣の牢の女に目をつける。「連そふ男憎みして家出」したという彼女の経歴が、「おもしろ」かったからである。つまり、世之介はこの女に、「反土着的、反辺境的」(森山重雄氏『西鶴の研究』五七頁)な、自分と共通の臭いを嗅ぎとったのである。

○〈巻四の二〉 二九歳。籠かご払いによって、二人は地獄から逃れる。逃げた二人の出合ったもの、それは再び地獄であった。つまり、女の縁者に彼女を取り返され、「とうとい所へまいる」ほど打擲された世之介は氣絶し、それから覚めた時生きながらの地獄風景を見るのである。

おのづとこころの開路をたどり、人家まれなる薄原にかより火の影ほのかに、卒都婆の数を見しは……

女の死体と出合った彼は、「其時連てのかずば」と責任を痛感し、自害しようとして、百性ひやくせいたちに押しとどめられる。いずれにしろ、女は殺された。図式的に言うなら、反土着はんつちやく（放浪であり、反秩序はんじつじ）が、日常にちじょうの論理ろんりの前に敗北したのである。西鶴は、ここを「分別所」と結んでいる。世之介は何を分別しようとするのか。転身てんしん（転向？）への伏線がここにある。

○〈巻四の三〉 三〇歳。「分別所」の帰結はとりあえずこうである。

世は五つの借物、とりにきた時間魔王へ返さふまで。合て三十年の夢、是からは何に成ともなれ

世之介は一九年前の念友を、寒河江に訪ねる。何故か。その相手が「十一面守本尊」を持っているからである。それは、曾て世之介が贈ったものであった。なぜ観音なのか。因みに言う、「観世音とは、世間（の衆生）が救いを求めるのを聞くとき、直ちに救済するという意」（中村元氏『仏教語大辞典』）と。そして、信仰深いとも思えぬ世之介が、一四、五歳の時、初瀬や石山寺を訪ねた理由も、これで氷解する。それらの観音に離脱を願ひ、救いを乞うたのである。しかし、救いはなかった。いや、それどころか曾て襦袢じゆばんの如く捨てた女達が化物となり、大挙して襲いかかって来たのである。その中には、夫を毒殺して世之介に従った女さえもいた。世之介の悪業が一挙に暴かれることになるのである。瀕死の状態に陥った彼は、「もはや是までと念仏申、心の劔けんを捨て、西の方を拜まがみ、再度救いを乞う。その時、や々と兄者が駆けつけ、彼は救われる。観音は、やはり居たのである。世之介の地獄めぐりはここで終る。注目したいのは、右の傍点部である。そこで、世之介は救いの代償として、「心の劔」を差し出さねばならなかった。「心の

劔」とは何か。野間光辰氏はそれを「迷蒙」（『定本西鶴全集』）と言ひ、暉峻康隆氏は「邪見な心」（『井原西鶴集(1)』）と記し、前田金五郎氏は「妄念」（『好色一代男全注釈(6)』）とする。また、森山重雄氏は一步踏み込んで、それを「内奥の自我」（前掲書・六〇頁）とした。私の考えは森山氏に近い。とりあえず、私なりに「荒ぶる魂」と解しておく。いずれにしろ、「心の劔」こそ世之介が世之介であることの証明ではなかったか。悪魔に魂を差し出したファウスト博士の故事は大袈裟としても、「心の劔」を返上した世之介は世之介ではない。そういう意味で「世之介の遍歴の本質的な意味は、この章で終った」「世之介は一度死んでしまふ」（森山重雄氏・前掲書・六〇頁から六一頁）と読むのは正しい。いかにも、世之介は「心の劔」を捨てたことで、実質的には死ぬのである。

○〈巻四の四〉（三二歳）「心の劔」を捨てた世之介は、差し当たりどう生きていくのか。以下の三話でそれが追求されていく。つまり、彼は寄生者として醜悪な姿をあらわすこととなる。曾て楽阿弥の庇護を固辞した（二三歳、若者らしいあの清冽さは、今の世之介にはない。まず彼は江戸で、唐犬権兵衛にかくまわれる。そして、男に飢えた御殿女中の手管にまんまとかかり、慰みの相手をさせられるのである。

○〈巻四の五〉（三三歳）大尺の案内役として、都に上り「むかし藝愛ぎあいしがる女」に、様々な密会の手管てつぱんを話させ、その聞き役となる。

○〈巻四の六〉（三三歳）再び夢山に同道して、嶋原へ。しかし、伴の善吉が石笏せきせきを相手に見事な捌きを見せたのに対し、世之介は太鼓女郎にさえふられて、こら悟るのである。「此口惜さ、人に買ってもらうて遊ぶべき所にあらず。おれも一度は。中々是では果はじ」と。寄生者の悲哀と、脱却の決意、それが次話への導入となる。

○〈巻四の七〉（三三歳）天秤の響きを「さもし」と聞いても、金がなく、人に寄生していたのでは大きなことも言えない。しかし、勘当の身では、生家に戻ること出来ない。つくづく、「我よからぬ事ども」が身にこたえるのである。世之介は一念発起して、高僧を訪ねその教えを乞うことにする。しかし、途中の道

で悪癖が出て、漁師の女房たちと戯れ、船遊び中に遭難してしまふ。炊飯の浦に打ち上げられ、堺までたどり着いた彼は、そこで父の死去を伝えられ、母親から「こゝろのまゝ此銀つかへ」と、貳万五千貫目の遺産を受け取るのである。

注目したいことが二つある。一つは、一瞬ではあったが家を振り返ったこと。

もう一つは、家に帰れないと悟り、音なし川（熊野川）に高僧を訪ねようとしたことである。なぜ熊野なのか。答えは、またしても観音なのだ。観音の住所である補陀落として、日本では熊野の那智山が見立てられていたという（『仏教語大辞典』）。いかにも、世之介は高僧の背後にいる観音を熊野を訪ねる途中、遭難したのである。この表題を「火神鳴の雲がくれ」という。『俳諧類船集』は「神鳴」の付合をこう記す、「さすらへし人」「死人の罪ふかき」と。つまり、ここは罪深き放浪者の世之介が観音に救いを求め、拒絶され、神鳴にうたれたと読めるのである。それでは「雲がくれ」とは何か。それは『源氏物語』における光源氏の入滅（『原中最秘抄』）のもじり、に他ならない。本文はなくとも、幻巻と匂宮巻との間に「雲隠」の巻をおくのが、「中世以来普通のことになっている」（小学館日本古典文学全集『源氏物語』4）五三七頁）という。（『源氏』の枠を過大視するのに賛成はできないが）もし、世之介が「俗源氏」（『こゝろ棄』）であり、『源氏』の「俳諧化」（山口剛氏『西鶴名作集』解説・五頁）であるとするなら、世之介もここで死ななくてはならないのである。そして、以下の四章は言わば宇治十帖の世界ということになる。

六

死んだ世之介はどうなるのか。彼は、盧生や浦嶋の如く、夢幻の世界を具体的な浮遊することとなる。

金が欲しい、金さえあれば「物の見事につかふて、世界の揚屋に目を覚まして」やるのにと願った世之介（巻四の七）。そんな彼に、莫大な遺産がころがり込んだ。彼はそれを使い、「わけ知」へと成り上がる（巻五の一）。つまり、「心の

劍」を捨てた代償として、世之介は金を得た。彼はそれを後楯として、どんな遊興をし、どんな世界をみたのか。以下の四章では、それが追求されていくのである。略述してみる。

○〈巻五の一〉 世之介は、小刀鍛冶の弟子の情熱に応じて床入りを許した吉野の「情深さ」を讚美し、身請けする。吉野は世之介の妻としても、見事な捌きを見せる。

○〈巻五の二〉 大津柴屋町を「身を持たる者の夜ゆく所にあらず」と評した後、三人で搔餅を焼きながら道中がしたいという禿の乞いに応じ「何事もなければなる物」と、金にあかせて大乗物を仕立てさせる。

○〈巻五の三〉 室津で「子細らし」い女が、若山所縁の香を聞き分けるのに着目し、床入り。螢を蚊屋に導くような風雅（『源氏』における「螢の巻」を踏まえるか）や、「さもしき事」を言わず、金にも執着しない様子に素姓を問うと、隠れもなき人の息女と分り、請け出して実家へ送る。

○〈巻五の四〉 滝井山三郎に執心する慶順の心底を「殊勝」と感じ、世之介は二人の仲を取りもつ（江戸で懺悔咄）。

○〈巻五の五〉 堺の色町、高洲へ出かけ、その「かぢくろし」さを「面白からず」と評し、嶋原・新町の良さを再認識する。そこで教示を受け、以後、寝道具などを遊女参会の度毎に持ち歩くことにする。

○〈巻五の六〉 筑前の柳町の不自由さを、「おもしろからず」と眺め捨て、宮嶋で「子細らしき女」に自分達の身分を見立てさせる。

○〈巻五の七〉 「見ぬ所もあれど、遠国の傾城の曾かたおかしからぬにこりはてゝ、地方遊里めぐりを止め、大坂へもどる。しかし、その遊女から放屁の歓迎を受け、「さもし」と思う。

○〈巻六の一〉 折檻されても、問夫の世之介と添い遂げようとする三笠の強さが描かれる。なるほど、その主題のため、世之介を貧乏人に設定するなど矛盾が生じ、「主人公の運命などは犠牲にされている」（『岩波古典文学大系』西鶴集（上）解説・二二頁）といった批判は免れない。しかし、「生き乍ら死んでいる世之介」（実相寺

昭雄氏・先掲)であつてみれば、そんな矛盾もさしたる問題ではないとも言えるだろう。

○〈巻六の二〉 火燵に隠し、世之介を逃がす夕霧の機転ぶりと 情の深さ。

○〈巻六の三〉 身請けされ人妻となつたにも拘らず、夢で心が世之介と通つてしまつたと知り、その執心を恥じて、尼寺へ駆け込んだ藤なみの誠実さ。

○〈巻六の四〉 世之介は七左に執心する御舟と別れ、「独さびしき二階」で、食物を乞う女郎達の弛緩した裏面を見て、「只影を嗜み給へ」と批判する。

○〈巻六の五〉 「名誉の上手」である世之介も、「一度々々に」仕懸を替え、「鯛がく」などと、卓絶した秘術を尽す初音に翻弄される。

○〈巻六の六〉 吉田の欠点を見つけ、手を切ろうと画策する大尺の手先となつた世之介は、吉田の放屁を咎めだして笑う。しかし、利発な彼女は即座の機転で凌ぎ、世之介は逆に笑われる。

○〈巻六の七〉 「男はよしあんつうは有浮世は隙」な伝七と世之介との二人を客とし、二人を車の両輪といい、三人で寝る野秋の全盛ぶり。

○〈巻七の一〉 祝儀を拒まず、「なふて叶ぬ物」と、遠慮なく受けとり禿に渡す一方で、気に入らぬ客には刀で脅しても会おうとしない高橋の反骨精神。

○〈巻七の二〉 今の薫の衣装好みに倣い、世之介は自分の定紋である瞿麦をあしらつた揃浴衣で、末社四天王らに「らく遊び」をさせる。世之介はそこで、金を始末してもどうせ死ぬのだから「あらばつかえ」といつている。

○〈巻七の三〉 金銭にうるさく、無心のため誰にでも状を送る太夫を、世之介は「憎さにくし」とやり込める。

○〈巻七の四〉 曾て三五度も振られた(巻三の五)高雄を訪ね、その相敵が「小判は木になる物やら、海にある物やらしらぬ人」ゆえ、千両位の金では自由にならないと分る。しかし、何とか盗み逢うことが出来る。そして、彼女の迫力に圧倒されながらもか首尾する。

○〈巻七の五〉 庄内で米を調達している時、和筋から京へ住替えになるという手紙を貰い、難波へ飛んで帰る。

○〈巻七の六〉 身請けされながらも、世之介のことを忘れかねて湯水を断ち、延宝五年に死んだ吾妻が、曾て雪の中を忍んで来た世之介に対し、観世こよりで二階から熱燭を差し出してくれたことを追憶する。

○〈巻七の七〉 新町で遊び尽くしたその足で、嶋原の朝ごみに出かけ、高橋ら全盛の遊女たちを揚げる。

○〈巻八の一〉 らく寝の車を金にあかせて仕立て、岩清水八幡の夜宮に出かける。

○〈巻八の二〉 野暮な十歳が大尺になぶられ小紫との床入りに、作藏を賭けているのを知り、世之介は後見役として同道。小紫は賭けの気配を察し、望みを叶えてやる。しかし、世之介は会つて貰えない。

○〈巻八の三〉 呉服の調達に来た難波男を案内して、東寺の御影供へ。紋日のため嶋原の太夫を揚げられないと分ると、「奢第一の世之介」は、大坂から上つた吉崎の水揚げを引き受け、贅を尽す。

○〈巻八の四〉 「おもふかぎりありとて、金銀洛中に蒔ちらし」た世之介は、「あつちの月思ひやり」ながら長崎の丸山へ出かける。そして、遊女たちの乞ひに応じ三都の太夫の衣装人形四人分を飾る。

○〈巻八の五〉 六〇歳になつた世之介は、これまでの生活をこう振り返る。

(遺産を譲られて以来、二七年間) 遊女町残らず詠めぐりて、身はいつとなく恋にやつれ、ふつと浮世に今といふ今こころのこらず親はなし、子はなし、定まる妻もなし。情なさけ念おもひ見るに、いつまで色道の中有に迷ひ火宅の内のやけとまる事をしらす。すではや、くる年は本封にかへる。ほどふりて足弱車の音も耳にうとく、桑の木あざみの杖つえなくてはたよりなく、次第に笑しうなる物かな、おれ計にもあらず見及びし女のかしらに霜を戴き、額にはせはしき浪のうちよせ、心腹の立ぬ日ひもなし、傘さし懸て肩かたくまにのせたる娘も、はや男の氣に入世帯姿となりぬ。うつれば替つた事も何か此うへには有べし。今まで願へる種もなく、死だら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても有難き道には入難し。あさましき身の行末、是から何になりとも成べしと、ありつる寶を投

捨……(傍点筆者)

三島由紀夫は言う、「人間はもし、老醜と自然死を待つ覚悟がなければ、できる限り早く死ぬべきなのである」(『心中論』)と。ダンディは老醜を嫌う。世之介も右の文の傍点部の如く、老醜を恥じた。それゆえに、彼は旅立つのである。

## 七

世之介はダンディであった。彼は放浪中も都会を忘れることがなかったし(二五歳)。ダンディズムの定義(1)参照。以下数字は同じ)、人工美の極である遊女を愛した(2)と(5)。もちろん、時間的にも経済的にも精神的にも余裕はあった(3)。そして、低俗や定着を拒否し(4)、放浪を重ねる姿には陰影さえも漂っていた(6)。つまり、第一節に示したダンディの条件を総て備えているのである。

なるほど、彼は一見、粋やかぶき者に見える。しかし、前者ほど禁欲的でもないし、「叛逆」(松田修氏『日本近世文学の成立』二八七頁)という点で、後者と相似してはいても、かぶき者といえるほどには階級を離脱しきっていないのである。いかにも、世之介は脱落を志向し、遂には脱落した。しかし、それは勘当されてという括弧をつけることで、はじめて可能となった離脱だったのである。

そんな世之介も、後半の四巻では死んだ。なぜ死んだのか。西鶴が彼を遊里に定着させることで、わざと殺したからである。なぜ殺したのか。それは世之介に後半の狂言廻しを演じさせるためではなく、「心の劔」を捨てた世界が如何に空しいかを説くためであった。なるほど、大尽になって後も世之介のダンディズム精神は色褪せたわけではない。いや、それどころか、下賤の者や野暮な男と契った吉野や小紫、金銭を卑しまない高橋、間夫を持つ三笠や御舟、二人の男を持つ野秋、ひいては吉田の放屁さえもその後の機転を讚美するなど、従来の遊女評判記類によって作られ角質化した遊里作法の枠を破ろうとする反逆精神は、ますます健在である。しかし、それとて遊里という枠の中にいる限りは、眼界があった。なぜなら、そこは、「一金二男」(『好色盛衰記』巻五の二)という如く、結局

は金銭が支配する世界(暉峻氏)だったからである。いや、そればかりではない。遊里にはもっと宿命的な欠陥があったのである。それは何か。いったい、遊里とは、廓とは何だったのか。前田愛氏は言う、

解放された遊行漂泊民のエネルギーが都市的世界の秩序を脅やかすアモルフな力と考えられたからこそ、それを廓という負の都市空間のなかに閉じこめる仕掛けが案出されなければならなかったのだ。(『反』都市としての廓)『国文学』昭和五六年一〇月増刊号)

と。現実世界の身分関係や論理が通用しないだけに、一見解放的に思える遊里。そこは右の如き反解放的な構造で支えられていたのである。しかし、翻って考えてみるなら「此道すぎきの」(『男色大鑑』巻六の五)西鶴のこと、遊里のそんな構造は充分知り尽くしていたのではないだろうか。知り尽くしていたからこそ、後半の四巻を書いた。つまり、前半の最後で世之介を遭難させて殺し、後半の彼を「中有に迷」(巻八の五)わせ、遊里を実体なく徘徊させた。そして、そこが桃源郷でも竜宮でもないということ、世之介の周囲に漂う倦怠の中に寓していったのではないだろうか。

とにかく、巻末で世之介は再び現世に戻る。その時、彼が真っ先にしたこと。それは、「死だら鬼が喰ふまで」「是から何になりとも成べし」と居直り、自分の肉体にあの「心の劔」を呼び戻すことであった。彼はそのため、「ありつる寶を投捨」た。何故か。なぜなら、それが、曾て捨てた「心の劔」の対価として彼に付与されたものだったからである。それを返すことにより、はじめて「心の劔」は甦るのである。

再び「心の劔」を得た、六〇歳の世之介は女護の嶋に旅立つ。いや、彼はダンディゆえに旅立たねばならなかった。何故か。前述の如く老醜を自覚したからである。いかにも、放埒な青春時代の行動原理であった「心の劔(荒ぶる魂)は戻った。しかし、今の自分に曾ての若い肉体はない。かといって、安穩に甘んずるほど低俗でもない。となれば、旅立つより他に道はないではないか。例えばそこが「恐ろしい流刑の島」(野間光辰氏『西鶴新新致』四四頁)であろうが、「女ばかり」

〔御曹子島渡り〕の理想郷であろうが、ダンディである限りは、定着と低俗を嫌う永遠の放浪者でなくてはならないのである。それゆえに、世之介は旅立つ。だから、それは決して「捨身の行」(野間光辰氏⑧)でも、「生きながらの葬式」(前田金五郎氏⑨)でもないといえる。もちろん、粹を極められなかったから(宗政五十緒氏⑩)でもないし、それが希望や祝意(醒峻康隆氏⑪・谷協理史氏⑫)に満ちているわけでもない。世之介は、ダンディとして、世之介が世之介であることの証として旅立つのである。

ところで、「人間五十年」(『置土産』序)という当時にあって、六〇歳の世之介が自分の老いをこう感じとっていたことを想起したい(第六節参照)。つまり、多くの時日が流れ、幼女はいづしか人妻となり、顔見知りの女も老婆となった。そして、自分も足は弱くなり、耳も遠くなって、毎日「心腹」を立てている。そんな世之介の姿に四一歳の西鶴を重ねて読むのは、あまりにも私小説的であろうか。しかし、西鶴が自らの晩年をこう記していたのは事実なのだ。

柳桜も年よりたる人の姿を見ることく。冬山の淋しき比都にのほりて。俳諧の友とせし団水言水などうき世の事ともを語りなぐさみて。何も心にかゝらぬ楽介世間のいそがしき時。ことに隙坊主と我身をうち笑ひて(『西鶴名残の友』巻四の一)

南となりには下女が力にまかせて拍子もなきころ槌のかしましくうき世に住める耳の役に聞ば。北隣には養子との言葉からかい。後には俳言つよき身の恥どもいひさがして。跡は定まって歪事になるもおかしき人心と。我はひとり淋しく雀の小弓など取出して手慰み(同・巻四の四)。

世間の人々が忙しく動き回っていることを横目に、自分だけは「隙坊主」と苦笑しながら、雀の小弓で「手慰み」とは、いかにも寂しい「楽介」ではないか。しかし、彼は私小説作家の如く、直截にはなく、極めて逆説的な屈折した形で、世之介を造型したような気がする。

核心に入ろう。世之介は何故、瞿麦の定紋を付けているのか。その点に関して私が注目したいのは、『俳諧類船集』が「瞿麦」の付合として、「あつき日」を

挙げていることである。めくるめく青春。「心の劔」を抱き、青春の若き日を全力疾走する世之介。それこそ、談林派の驍将として、阿蘭陀西鶴として、最も前衛的な若き生を生きて来た西鶴の青春そのものだったのではなかったろうか。

そういう意味で、『一代男』を「青春の讃歌」(醒峻康隆氏⑬)と読み、「青春の遺書」(同・一五三頁)と読むのは正しい。ただし、その場合次の如く限定しておく必要がある。「失われし青春への讃歌」と。問題はこの傍点部に、どこまで深入りするかだ。つまり、この「失われし」ということに、どう寓意を読み、失われた原因をどこまで考究していくかということである。なるほど、「当世男の複合的存在」(野間光辰氏)であるという意味に於て、世之介の反逆は世之介一個人のものではない。また、彼が「一代男」として、「一生子なくらす男」(『警諭尽』巻二)として、子孫を残そうとしなかったことなども、読み方によっては強烈な御政道批判となる。しかし、その反逆の標的を、「秋霜烈日の如き綱吉の法度政治、恐怖政治」(野間光辰氏「西鶴と西鶴以後」四五頁)や、民衆のエネルギーを庄殺する商業資本にまで拡大することには聊か抵抗を覚える。私はとりあえず、「心の劔」(『荒ぶる魂』や「若き生」(『流動を志向するエネルギー』)を失い、低迷弛緩した当世に対する反定着の立場からの反発とだけ言っておく。

もちろん、右のように考えたからとて、『一代男』誕生の意義が毫も薄れるものではない。村上龍氏は「純文学の純とは毒のこと」(某文庫本広告)という。純文学かどうかは別として、『一代男』には十分な毒があった。また、その「新鮮な描写」(醒峻康隆氏「西鶴」評論と研究(上)」一〇七頁)は、先行する『恨の介』や『浮世物語』をはるかに凌ぎ、強烈な臨場感を醸成していた(野口武彦氏「浮世草子の方法—リアリズムの言語意味作用」『国文学』昭和五三年二月号。など参照)。いわば、ロラン・バルトの言ひ、エクリチュールの実践、つまり「感動的な記号学」(花輪光氏訳『文学の記号学』四五頁)が、そこにはあるのである。

以上、『一代男』に対する私なりの読み方を提示してみた。独自の読みに拘泥するあまり、「切り捨て」(谷協理史氏「西鶴研究序説」四八頁)や、「都合の悪い部分を黙殺」(同・五二頁)したこともあったかも知れない。しかし、『一代男』は

(その俳諧性へ諸謹慎)を充分認めた上で) 右のような読み方も可能なのである。ただ、問題なのは、この反家庭小説から出発した西鶴が、『二十不孝』を経て、『世の人心』という家庭小説を書くに至ることである。何故なのか。その軌跡は是非とも辿ってみる必要があるようだ。

註

一 前田金五郎氏(『好色一代男全注釈』(上)七二頁)は、この部分を「注目して」と訳している。しかし、世之介の心情を考えると、ここは「見咎め」とした方が相応しいような気がする。

二 世之介が瞿麦の定紋を付けていることの意味は深い。しかし、その意味はまだ充分に説明されていない。因みに、森山重雄氏はそれを「世之介の聖性の象徴」(『西鶴の研究』四九頁)と読み、前田金五郎氏はモデルと何らかの関係があるのではないかと、推定している(註一の書・五九頁)。また、菊池真一氏は、「なでしこ」とは、その主要テーマ「好色」の象徴(『好色一代男』の「なでしこ」『解釈』・昭和五〇年二月号・四二頁)と解釈している。私は、『類船集』を以て、それを(『青春の』「暑き日」の象徴と読んでみた。いずれにしろ、傍証が弱い。今後引き続き考えてみたい。

〈付記〉

本稿の校了直前に、『好色一代男』(松田修氏・新潮日本古典集成)を入手した。四〇頁に互る「解説―『好色一代男』への道」を含めて、氏の読みには啓発される点が多であった。私の読みと付き合わせて、今後改めて論じてみたいと思う。

因みに、巻四の三における「心の劔」を氏は次のように解釈している。

「自己や他人をあたかも剣のように傷つけてしまう悪意・害心」(一二二頁)。